

読書

写真家三木淳と「ライフ」の時代

須田 慎太郎著



平凡社・3672円

戦後に活躍した写真家として土門拳の名は有名だが、土門宅に押しかけ住み込んだ三木淳はどうだろう。葉巻をくわえて笑う吉田茂の写真は知られていても、それを撮った三木淳を気に留めることは少ないのではないかな。なぜだろうと思っていたが、本書を読んでわかった。三木が若くして活躍の場をアメリカに求めたからである。

戦後、三木は欧米仕込みの編集者・名取洋之助の「サンニュース・フォトス」で働くも、反りが合わず退社。その後撮ったシベリア抑留の兵士が帰還する写真が「ライフ」誌に載り、タイム・ライフ社に入社する。翌年に朝鮮戦争が勃発。日本は「ライフ」のカメラマンの基地になり、彼自身も戦地に赴く。まさにトントン拍子の勢いで、戦後のグラフィジャーナリズムに多大な影響を及ぼした雑誌で、刺激的な30代を過ごすのだ。先の吉田首相の写真では、「ライ

カメラの青春 生きた男

「表紙を飾るといふ栄誉にも浴している。」

マーガレット・バークホワイト、ロバート・キャパ、ユージン・スミスなど、現代写真をリードした大物とも親交をもつが、中でも気の合ったのはキャパで、彼が命を落とすことになったベトナムに旅立つときのエピソードは心を打つ。

時代によって輝きを放つ職業がある。戦後の写真家はまさにそれだった。報道写真家は世界を駆けめぐって「獲物」を狙い、見る側もその結果を心待ちにした。彼らは写真を理由にどこにでも出かけたし、だれにでも会えたとし、収入の多さもケタ違いだった。人を行動にかりたて、世界へと押し出した写真の青春期が、三木の人生には興奮とともに圧縮されている。

戦後の日本経済を支えた主なものにカメラ産業があるが、日本製品が世界に認められたきっかけは「ライフ」のカメラマンが朝鮮戦争でニコンのレンズを使ったことだった。橋渡しをしたのは三木である。日本のカメラが注目されたのと、彼自身が上りつめる過程が重なるところに、歴史のおもしろさがある。

(大竹昭子・作家)

すだ・しんたろう 1957年千葉県生まれ、写真家。大学在学中から三木淳に師事。86年、日本写真協会新人賞受賞。2005年から07年にかけて「ZOOM Japan」編集長。写真集に「人間とは何か」など。